
撓垂れ少女の生的倒錯

はまな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

撓垂れ少女の生的倒錯

【Nコード】

N9117V

【作者名】

はまな

【あらすじ】

セクサロイドのコーデイは六名を殺して逃走中の極悪クソ機械人形のはずだった。そのはずが、捜査官フィリップは不幸な事故から彼女に助け出され、同じベッドで眠ることになる。美しい少女の前に、彼は死の匂いと少女の匂いを同時に嗅ぎ取っていた。

何故人に危害を加えないはずのアンドロイドが殺人を犯したのか。そしてコーデイは何を求め、フィリップは彼女の一体どこに共感しているのか……

自殺をテーマにした短（中？）編SFもの。

撓垂れ少女の生的倒錯

またこの歓楽街のどこかで、違法に増築されたビルが倒壊する轟音が響いている……。

フィリップ捜査官は目の前に横たわる少女と、頭の中に詰め込んできたデータを比べて、溜息をついた。二百階建ての娯楽ビルが立ち並ぶ表通りから二百メートルほど路地を進んだ先、今彼が建っている場所は、背の高いビルに囲まれた暗い樹海の中であり、真昼でも日がささないしなびた裏の世界だと言って良い場所だった。

『フィリップ捜査官、コルデリアを発見したのか？』

データバンクと共に頭に埋め込まれた通信装置が、本部の捜査官監視員の澄み切った声を脳みそに直接伝えてくる。

「モニタしてないのか」

苛立ち紛れに、わざとそう声に出して返答した。

『そこは都市監視システムにとってのダークタウンだ。監視カメラも集音機も衛星画像もバイオセンサも何もかも役に立たないか設置されていないか　とにかく、こちらからでは様子が分からない』

「俺の視覚を使えよ」

『権限を譲渡せよ』

フィリップは面倒に思いながらも、頭の中で操作を行った。プライバシー、基本人権、人格不可侵領域の一部、それらの項目の保護を一時的に解除する。同時に危険情報譲渡規制を回避する為に、外部ネットの政府公認データチェッカーに身を委ね、自分が見ているもの、視覚情報をチエックさせる。

全部で一秒ほど。フィリップが見ている光景に、特定の危険な因子や情報、極端な不快さが含まれていないことをチエックし終えたプログラムが引っ込むと、安全性が保証された視覚情報が捜査監視

員にリンクする。

自分が見ているものを本部も見ていることを実感しつつ、フィリップは訊いた。

「こいつであってるか」

『確認した。十三時間前に拘束を振り切って逃げた時と同じ個体だと思われる』

「じゃあこいつがそうなのか」

『可能性は高いが確実にそうだとは言い切れない。内部情報を調べて同一性を調べるべきだ』

やれやれだ。フィリップは嘆息した。やる気の無いだらけた態度を気取っていなければ、恐ろしさに足がすくんでしまう。

そっと、小さな歩幅で歩みだし、倒れ伏している少女に近寄る。なるほど、美しい。フィリップは素直にそう感じた。

少女は、見た目には大体十五、六歳に見える。肩辺りまで綺麗にカットされた黒髪が、幼さと妖艶さを共に増加させている。

身につけているのは、薄い布地が特徴的な和服であった。ユカタと呼ばれるものだったか？ フィリップはその奇妙な格好に顔をしかめた。浴衣はあちこち汚れており、薄桃色の明るい色が所々で損なわれている。動き回ったからだろうか、着乱れてもおり、白い足や肩がむき出しになってしまっている。

文句なしの美人。だが、捜査官を二人殺して逃亡したクソツタレでもあるし、それ以前に、歓楽街の不幸な一般人を六名も殺害したアホたれでもある。

恐る恐る、フィリップは少女 コルデリアと呼ばれるアンドロイド（だと思われる）の頭を掴んで、耳の裏側にある差込口を探った。

小さな蓋を開けて、内部の差込に、腰の端末からコードを伸ばしてつなげる。

少女の情報が端末に流れ込む。それを無線で自分の頭に送り込む。確認した。個体識別用のチップが体内に残ってる。こいつはコル

「デリアだ」

『識別情報を送れ』

言う通りにして、データを送信しながら、フィリップはコードを引き抜き、代わりに沈静プログラムの入った小型のメモリをそこに差し込もうとした。

なぜこの少女・コルデリアが機械の癖に眠っているのかは知らないが、いきなり起き出して襲い掛かってきたらひとたまりも無い。全機能を一時的に凍結する強烈な沈静プログラムがはいったメモリが、これほど安心できる道具に思えたことは今まで一度も無かった。だが、それを差し込むより先に、フィリップに抱えられたまま、コルデリアは瞼を開いた。

フィリップの脳内で、考えうる限りの罵声が飛び交った。畜生、くそつたれ、馬鹿野郎、いかれポンコツ人形め……

前任の捜査官二人を殺した時のコルデリアは、冷淡でためらわず、とにかく恐ろしいやつだったと、フィリップは聞かされていた。おしまいだ。買ったばかりの初心者用遺伝子解剖キットも、家で主人の帰りを待つ、機械ではない、貴重な生の子猫も、みんなさよならだ。

しかしそうした覚悟は無駄になった。

目を開いたコルデリアはしばらくの間フィリップの腕の中でもぞもぞと動き、くびをまわして辺りを窺った。

小さな口が開く。

「あなた、誰？」

フィリップが黙っていると、彼女は彼の服の襟を掴んでもたれ掛かりながら起き上がり、ぺたりと地面に座る格好になった。

「ここはどこかしら」

あどけない、呆けた顔で辺りを観察するコルデリアに、フィリップは啞然となった。一体全体どういうことだ？ こいつは一級の危険ロボットじゃないのか？

「ねえ、貴方、私を助けてくれたの？　なんで私が倒れていたか、

知らない？」

「いや、俺は……」

答えかけて、首を振る。今度は声に出さずに、監視員に通信する。
「おい、見てるか、聞いてるか？ こいつは一体どういうことだ」
『不明だ』

（これが本当にコルデリアか？）

『容姿は十三時間前と一致している。そのセクサロイドが外見変化性的愛玩人形機能をもっていることを考えても、十三時間での完全変態は不可能だ。何より識別情報は完全にそれがコルデリアであることを示している。ファイリップ捜査官』

（なんだ）

『急いで彼女を拘束してその場を逃げ出せ。そちらの現在地から見て東側のE32区画ビルが倒壊を始めた』

「……なんだって？」

聞こえたことが上手く理解できずに 否、理解するのが嫌で、
ファイリップはそう聞き返した。

「だから、私はコルデリアっていうの。名前よ。コーディって呼んでほしいわ。貴方の名前は？」

お前に言ったわけじゃない！

『捜査官のすぐ隣の隣のビルだ。西に向かって倒れだした。そこにいと死ぬぞ』

神よ これまでの祈りを全て撤回して、ファックサインを心の中でそいつに送りつけつつ、ファイリップは慌てて立ち上がった。コルデリアの腕を掴んで立たせると、彼女はそのまま彼の腕に抱きついてきた。

「何してるー！」

悲鳴を上げる。

「名前も聞かずにするの？ そうするのが好み？ ねえ、貴方の好みを教えて……？ わたし、大抵の男の人が満足する娘になれるのよ……」

何をするって？ この生きるか死ぬか あるいは死に掛けるか死ぬかの状況で！

すぐに逃げ出さないとならない。フィリップは彼女を引き寄せ、沈黙プログラムを耳の後ろに差し込もうとした。引きずって逃げるか、あるいは見捨てて逃げるにしろ、腕を離してもらわないとならない。

だが目論見は失敗した。コーデイは彼にしなだれかかり、彼が手に持った小型メモリは彼女の後頭部をかすただけだった。

コーデイの吐息がフィリップの首筋をくすぐる。乱れた浴衣の胸元が暗い路地の中でひどく眩しい。高級セクサロイドの名に恥じぬ、見事な色気である。

そうだったことを感覚して、フィリップは途端に何もかもが馬鹿馬鹿しくなった。ああ、くそ、俺はもうお終いだ。狂った人殺しの水商売人形に迫られながら、ビルに潰されるのだ。なんてひどい人生だろう。どうか、俺が死んだ後、俺の自宅にいるネコだけは、あの賢い黒猫レンブラントだけは助けてやってくれ……だれでもいいから。

「助けてくれ……」

思わず、そう呟いていた。その言葉に反応して、コーデイの顔がはっとした表情になった。

その直後、重苦しい音が響き渡り、いくつもの特殊コンクリート片が降り注いだ。倒壊したビルに巻き込まれ、ドミノ倒しのように連鎖崩壊しつつあるすぐ隣に立つビルの建材だった。

すぐに全てが闇に包まれ、フィリップは自らの意識を強制的に途絶えさせた。

フィリップはもうずっと長い間、身近に誰かの体温を感じたことがなかった。愛しのルクレツィア　六年も前に、故障した愛玩用アンドロイドに殺されてしまった　を喪つて以来、誰か人間に興味を持つことも、その肌に触れたいと思うことも無かったし、実際に触れても何も感じなかった。

だがまどろむ意識の中で今、彼は自分の体に触れている誰かの熱に、言いよの無い安心感と、もっと触れていたいという欲求を感じていた。

うう、と彼は呻いた。体中が痛い。何が起こったのか。

「大丈夫、ですか？」

声がすぐ耳の近くで発せられた。目を完全に開けると、自分が誰かに支えられて引きずられているのだと分かった。誰か。横を見ると、黒髪が揺れている。

「コルデリア」

狂ったセクサロイド。一緒にビルの下敷きになったはずの。

今は、もう恐怖も疑問もさほどわかなかった。ただ、痛みと気だるさが頭の中を支配していた。

コーディは彼が不思議そうな顔をしているのを見て、説明を始めた。

「ビルは、上手く反対側のビルに寄りかかったんです。そのおかげで、潰されはしませんでした、私も、貴方も。ただ、コンクリートが降り注いだせいで貴方は体中怪我をってしまったみたいですけど……」

路地での艶っぽい喋り方が、いつの間にもやら淑女然とした、丁寧な語を織り交ぜた線の細い物に変わっている。それもフィリップはあまり気にならなかった。

何とか怪しいながらも足を動かし、コーデイに寄りかかりながら歩き出す。

「どこへ向かっている？」

聞くと、コーデイは少しばかり困ったような顔になった。

「……どこか、休める場所があればと思ったんですが……私はクレジットを持っていないので……」

「さっきの あの路地からは、どれ位移動したんだ？」

「表通りに出て、一キロほどです」

フィリップは辺りを見渡した。色とりどりの、眩しいほどに煌びやかな看板が、深夜だというのにそこかしこで光り輝いている。電子ドラッグ専門店、昔ながらの怪しいマッサージ店、あらゆる人様にお見せ出来ない類の玩具を揃えたショップ、記憶・体験売り、快樂クオリア変質技師の違法医院に、人間の頭部や下半身や胸だけを人工培養して売り出す屋台……

まごう事なき、この国一番の歓楽街にして、腐った町だった。

一瞬、フィリップは捜査本部に通信して、助けを寄こしてもらおうと思った。位置情報を送信して、分厚い装甲を持った捜査用車両を待つだけで良い。だが、彼は脳内の通信機器が全く反応しないことに気がついた。

手で側頭に触れるとぬるりと血の感触がした。どうやら、コンクリの欠片がぶつかっただけに、中の機械まで故障したようだ。

頭の傷を意識したことで、全身の傷が痛みだした。痛み具合から予想するに、骨折や内臓損傷は無いと思える。だがあちこちに打ち身や切り傷が出来、肋骨にはひびも入っているだろう。今すぐどこかで横になりたかった。強化された身体機能が、じっくり休めばすぐにこの程度の傷は治してくれるはずだ。そう思い、フィリップはコーデイに教えた。

「ここから一キロくらい行った所に、俺の家がある。そこに行こう」

コーデイは、その提案に、笑顔で頷いた。本来ならば捜査本部の捜査官を待つべき状況だった。だが、フィリップは一刻も早く横に

なりたかった。疲れ果てていた。

「ええ、そうしましょう。案内をお願いします、ええと」

「フィリップだ。フィリップ・ファン・レイン」

「フィリップ。道案内を、お願いします」

引越してからまだ半年しか経っていないその高層マンションの一室は、フィリップが特殊捜査官になってからたった五年で溜めた貯金で購入したにしては、中々に上等な部屋だった。地上三十八階、角部屋。リビング、書斎、ダイニングキッチン。三人家族で住んでも不足無いくらいに、広く部屋数にも余裕がある。

フィリップがここを買えたのは、このマンションがあつた腐れた歓楽街に程近いからだ。一応一般街の中ではあるが、歓楽街に程近いこの場所は、安全と倫理を重視する人々にとってとんでもなく不人気であり、土地も部屋も総じて安い。

疲れきって、意識を再び失う寸前だったフィリップは、コーデイにほとんど抱きかかえられるようにしてエレベーターに乗り込み、自室に辿り着いた。何とか電子ロックを解除して玄関の扉を開けて中へと入る。扉が閉じて、室内の静寂が耳に安らぎを与えてくれると同時に、もう一つの安らぎが廊下をパタパタと走って出て来る。

「ああ、レンブラント、元気にしてたか？」

しゃがみこんで、フィリップはその愛しい黒猫を撫でた。人間に興味が無くなった後、女の腿にも胸にも欲情しなくなった自らが、唯一つ心揺るがされた可愛い生き物が、その猫だった。

ふらつきながらフィリップはひとしきりレンブラントを可愛がり、そしてとうとう体力が限界に来ていることを悟った。

「すまない、部屋まで連れて行ってくれ、突き当りを右だ……」

コーデイは従順に彼を運んだ。抱きかかえ、引きずり、部屋のドアを開きベッドに彼を横たえた。

柔らかな羽毛布団に身を横にした途端に、様々な感情が沸きあがってくる。生き残った喜びや、危険な場所に単独で自分を派遣した

本部への怒り、そして死んだルクレツィアへの悲しみと愛情。

フィリップのすぐ隣に、軽い音を立ててコーデイが寝転がった。彼女はフィリップの背中にぴったりとくっついて、じっとした。

疲労や痛みや眠気で崩れかかった自意識の一部が、コーデイの体温を、求めていた。

この六年、生きている人間に何か欲求を抱いたことは無い。だが、フィリップは死んだ人間や、死にゆく人間には、時折惹かれることがあった。それは、ルクレツィアが死の世界へと渡ったからであり、彼女と同じ場所に行ったり、同じ場所に行こうとしている人間にだけは、フィリップは様々な欲求を持ったり興味を持つことが出来たのだ。ルクレツィアの元を目指す人間たち。ルクレツィアの眷属。愛するものに近い人間たち。

だが死んだ人間はこの世にいないし、死にゆく人間はすぐに死んでしまう。そもそも死後の世界のある無しなど彼の知るところではない。こんなものは悪趣味な妄想に過ぎないのだ。

それでも彼が触れていたいと思える人間は、死人か、死に掛けの人間だけだ。コーデイはそのどちらでもない。人間ですらない。ただの性玩具の人形に過ぎない。高度な人工智能だか人工無能高を搭載したセクサロイド。アンドロイドは死なない。ロボットの機能停止は、単に「停止」と呼ばれるし、破壊された場合も「故障」か「分解」と呼ばれる。

それでも何故かコーデイを、フィリップの心のどこかは求めている。

彼の頭のそばにレンブラントが擦り寄ってきた。ふさふさの体毛を彼の頬に押し付けて、そのまま丸まって眠る。

猫と、コーデイ。フィリップは二人に挟まれて眠りについた。

眠りから覚めてフィリップは、上手く体が回復してきていることを最初に実感した。傷はあらかたふさがり、痛みも和らいでいる肋骨も一週間以内には完治するだろう。まだふらつくことはふらついていたが、それでもコーディに頼らず立ち上がることが出来た。

ベッドから立ち上がって、フィリップは未だ布団の上で寝息を立てるコーディを見つめた。アンドロイドは別に眠らずとも活動できる。が、愛玩用、特にセクサロイドなどは人間らしさを強調する為に、さまざまな、無駄ともいえる機能を搭載していると聞いたことがあった。

この眠りも、その一つなのだろうか。疑問に思い、フィリップはしばらくの間彼女を見つめ続けてしまっていた。

長いまつげ、形の良い鼻、ピンクの唇。細やかな肌が、桃色の浴衣のあちこちからはみ出している。成長途中の少女の理想像ともいえる体つきは、コーディを作った原型氏が神がかり的な腕を持っていたことを窺わせる。

コルデリア。基本身長百六十センチ。シフトによる変化限界がプラスマイナス五センチ。肌の色、目の色、手足と指の太さ、胸の大きさ、腰と尻のバランス、口内や膣内の粘膜形状。それらが主なシフト。形状変形機能の項目である。フィリップの頭の中のデータには彼女のスペックが事細かに記録されていた。オーダーメイド、一品物の作成に大きな評価が。無論表社会には知られることのないものとしての。寄せられている、『クラウディウス・キウイリス社』によって組み立て製造された。有機生体部品と無機械部品の芸術的なキメラ。脳みそは無く、優秀で複雑な。それこそ脳みそ並みに。機械回路が積み込まれている。外見は東洋人に近く、元は日本人の希望で作られた固体だという。その日本人は歓楽街で大きな権力を持っていたとある組合の幹部で、金に任せて彼女を作

り、満足していくらか楽しんだ後、多くの客を彼女にとらせた。その後、殺された。コーデイが殺したのだ。何故そうしたことになったのかは分からない。アンドロイドが人を殺すことは、常識では考えられないことだ。

幾重にもプロテクトされた倫理条項。目的以外の行動をとらせないための機能制限。万が一のための初期化プログラム。

だが良いことにも悪いことにも奇跡は起きる。それをフィリップは知っていた。前の晩までランプで仲良く遊んでいた人間と愛玩用アンドロイドが、次の朝には冷えた死体と殺人ロボットという関係に変わっているのをうんざりするほど見てきた。アンドロイド専門の特殊捜査官になってからは特に。そしてその最初の一例は、ルクレツィアと彼女が飼っていた愛玩アンドロイドだった。ルクレツィアを殺したアンドロイドは、頭の中身のアップデート中に起こったトラブルで回線が何度か切れたことよって、感情を司る回路と倫理条項、さらにはその保護機能がまとめて駄目になった。それに気がつかずルクレツィアはいきなりうんともすんともいわなくなったそのアンドロイドを心配して、添い寝までした。結果、翌日には死体になった。

そこまで考えて、愕然とする。

(おれは、なんてことをしてるんだ……)

猛烈な、後悔というべきか、津波のようなわけの分からなさがあった。襲ってきた。

自分は、殺人アンドロイドと共にベッドですやすやと眠ってしまったのだ。わざわざ通常捜査官が携帯しているものよりも二回りも大きい自動拳銃を携帯許可まで取って所持している自分が、それを使って打ち抜く相手と共にベッドで仲良くお休みとは。

「呆れ果てるな、全く……一体全体、俺は俺のベッドで何をしてるんだ」

体のあちこちに装備したままだった端末や電磁ナイフ、そして例の大型拳銃を全て身体から外し、ベッドの隣の金庫に放り込む。

ロックしたのを確認してから、フィリップはバスルームへと向かった。

服を脱ぎ脱衣籠に投げ入れ、脱衣所から浴室へと足を踏み入れる。換気扇を止めてシャワーから湯を出す。頭から温水を被って彼はしばらく無言で立ち尽くし、それから思い出したかのように体を洗った。歓楽街とその裏路地で、そしてそれ以前に日中署内を動き回ったり、現場に急行する中で走ったりしてかいた汗が流れ、にわかには清潔感が戻ってくる。

冷静になればなるほど、今の状況の馬鹿馬鹿しいまでの異常さはつきりと感じられる。第一に、これは職務上中々にまずい状況だ。殺人容疑のかかった被疑者、それもほとんど黒の、よりによってアンドロイドと共に帰宅してしまった。

アンドロイドの殺人はある意味で人間の犯した殺人よりも数段厄介な事件である。安全なはずの道具的存在が人殺しをしたとなると、メーカーや消費者、ロボット賛成派と反対派、アンドロイド推進主義の議員とそれを批判する議員、とにかく社会全体にとっての問題となってしまう。有耶無耶なままに解決ということにすることはできない。もし万が一にでも、人間より優れた殺人ロボットが 昔の映画にあつたような 現れれば、それこそパニックが起こるだろう。ロボット産業が上向きにしたこの国の経済はそうなった場合、グラフの上でとつともない急角度のカーブを描いて底辺まで落下する。

欧米の宗教的批判が声高になつている今、事故による傷害事件一つでもロボットは槍玉に挙げられかねない。この国が「悪魔崇拜のピュグマリオンコンプレックス国家」としてレッテル貼りされればそれはそれで悪夢的な未来が待っている。

フィリップ達特殊専任捜査官は、そうした自体を防ぐための存在だ。細大漏らさずアンドロイドに関わる事件を調査し、すべての異常に対して完全な答えを提示することで、ロボット交じりの社会に安寧と経済繁栄をもたらす。

(くそつたれ、俺以外の事件関係者に不幸あれ、だ)

コーディを製作した業者、それを依頼した男、コーディが風俗店で働くことを提案した手配屋、その店に集った助平な客ども。まあすでにそのうち六名はコーディ自身に殺されているのだが……。

シャワーを止める。お気に入りのハーブの香りが、泡と共に排水溝に流れる。ソープを洗い流して、フィリップは脱衣所に戻った。そこに、コーディがいた。桃色の浴衣を上品に脱いでいる。衣擦れの音が響き、肌の全てが顕わになる。

「フィリップ、おはようございます」

今はもう真昼だけだな。心の中でそう答えつつも、フィリップは挨拶を返した。

「おはよう、コーディ。浴衣をどうする気だ？」

「これ、汚れてしまって……洗濯機を借りられないでしょうか」

「構わない。だが、うちにあるような洗濯機で洗って良いものなのか？ 生地が痛まない？」

「合成繊維の複製品レプリカですから……」

コーディは浴衣の下には何も身につけていなかった。細くしなやかな体を動かし、柵に乗せられている洗剤を手取る。

「こっちの柔軟仕上げのやつの方が良い。そっちはヘンドリク社の安物で、乾いた後に布を傷める」

一通り二人で洗濯の準備を整え、洗濯機を動かす。清音式の高機能洗濯機が静かに動き始めると、フィリップはタオルを手にとって自分の体を拭き始めた。思えば、男女が二人して全裸のまま洗剤選びをしているのだから、間抜けなことこの上ない。

「有難うございます」

コーディが頭を下げる。見事な黒髪が揺れ、良い香りが空気に混じる。華奢な肉体のラインが、所作と合わさってより儂さを強調する。

「シャワーを使うと良い。君が防水仕様なら」

半分皮肉、半分冗談で言う。コーディは控えめに微笑んで、浴室

へと入っていく。半透明の浴室扉の向こう側で、彼女が体を洗い始める。

フィリップは下着とシャツを身につけ、リビングに戻った。食料棚から缶詰を取り出し皿にあげ、床に置く。

「レンブラント」

その一言だけで、賢い彼の飼い猫は小走りに寝室から抜け出してくる。餌の前で足を止め、フィリップを見上げて小さく鳴いてから、一生懸命にささみ入りの猫用缶詰に食らいつく。

その様子をほほえましく思いながらフィリップも冷蔵庫から纏め買いておいたバランス栄養・ジュースと一つまみで百キロカロリーを摂取できるという売り文句で宣伝されているカロリーブレッドを取り出して素早く胃に入れた。

ごろごろと喉を鳴らしながら皿をなめるレンブラントを残して、自室＝寝室へと戻る。

ドアを開けて、フィリップは香りに顔をしかめた。コーディの香り。少女の香り。それが充満している。悪いにおいではない。だが、ここ六年遠ざけてきた香りではある。

ルクレツィアはどんな香りだっただろうか。画像イメージや触感データならば、プライベート用の独立端末に収められている。望むならば仮想的に再現することも出来る。実際にしたことは無かったが。

だが嗅覚的な情報は保存していなかった。

部屋にしみこむ少女の香り。一晩眠ったベッドに腰を下ろして、フィリップは未だその布団にコーディの体温が残っていることに気がついた。さらりとした布団カバーの上に指を走らせる。ほのかな温かみが彼の指を包んだ。

(アンドロイドの体温だ)

工業用のロボットは息をせず汗もかかず口も鼻もない。メンテナンスを除けば二百時間連続で自動車の組み立てやゴミ処理を行える。あるいは観光ガイド用のアンドロイドでさえ、発汗機能はもとより

あらゆる体液の分泌機能を持ち合わせていない。両者共に、体温を持つことも無い。必要が無いからだ。

だが愛玩用となれば、ユーザーが求めるのはより人間らしく同時に非人間的な　つまり、外観や触り心地や表面的なコミュニケーションにおいては人間そのものであり、一方でユーザーの都合に合わせて非人間的なほどに命令に従い、素直で、可愛く、哀れな存在である　アンドロイドである。

呼吸、発汗、脈拍、体温は、基本的オプションであり、愛玩用アンドロイドのアイデンティティでもあるのだ。それがよりこだわりの強さを求められるセクサロイドともなれば各種分泌物は人間のそれをほとんど模倣し、コーデイのような最新モデルは、膣分泌液は勿論唾液や尿まで生成可能である。

コダワリ派オタクの満足できる一品というわけだ。

職務を果たせ、という心の奥からの命令の声は、いまや小さく萎んでいた。というか、そのような使命感や人生の正しい歩み方の為の意識の類は、ルクレティアが死んでからずっと小さく解け崩れ続けている。

寝転ぶ。ともすればまた眠ってしまいそうだった。今頃本部は自分を搜索するために倒壊したビルの瓦礫をあさっているのだろうか。それともとくに捜査中の死亡が推定のまま確定しかかって、葬儀の準備が進められているのか　？

コーデイが、部屋に入ってくる。フィリップがまどろんでいるのを見て、彼女は自分も布団に入り込んだ。薄いシーツを体に巻きつけ、フィリップに寄り添う。

体温。安心感がフィリップの中を駆け巡った。死人か死にかけの人間の体温。自分が唯一つシンパシーを感じられる魂の暖かさ。

「コーデイ……君は、人を殺しただろう」

フィリップは静かに訊いた。もしかすればその言葉が引き金になって、コーデイは彼の首を締め付けるかもしれないが、それでも構わないという気持ちでフィリップを支配していた。

コーデイは、ゆったりと動き、仰向けに転がっているフィリップに覆いかぶさるように体勢を変えた。彼女の髪の毛の先が、フィリップの首筋をくすぐった。湿った唇が動く。

「さあ。憶えていませんけれど」

しらをきるには、ひどく自然な受け答え方。もっともアンドロイドであれば朝飯前なのかもしれないが。

「記憶があるが無かるうが、君は六人を殺しているんだ、コーデイ」

幼い子供に言い聞かせるかのように、フィリップはそう言った。

コーデイがしおらしくそれを認めるか、あるいは怒り狂って襲い掛かってくるならば、すぐにでも枕もとの小さな机の引き出しに入っている小型メモリ 沈静プログラムを彼女に流し込み、抱きかかえて署に連れて行くつもりだった。

だがコーデイは、くすりと笑って、困ったような顔をしただけだった。

「そうなんですか。でも、やっぱり知りません」

あまりにあどけない表情だった。歓楽街のポルノ王や、そのポルノ王が作る作品に登場する、裏社会慣れした少女俳優達、自分のフエティシズムの求めるものを満たす為なら人殺しも厭わない男達

そういった、擦れすぎた人間たちを仕事の中で大勢相手にしてきたフィリップにとって、コーデイが今見せている微笑は、あまりに無垢すぎた。善悪を知らず、生まれてきてしまったことに戸惑う小鳥のようだった。

フィリップがどうしようもなく黙り込んでコーデイを見つめると、コーデイは優しく彼に口付けした。甘く、しかし透き通った香りが口から鼻に抜けた。フィリップは子供の頃、とうの昔に絶滅してしまった桜という樹木がつける美しい花の再生サンプルを見たことがあったが、その花が発していた香りに似ていた。

コーデイは唇を離すと、ふう、と熱っぽい息を吐いた。

フィリップの頭の中から、捜査官としての義務感が一時的に消え

てしまっていた。その代わりに、コーデイの体温を感じたいという欲が湧き上がってきていた。

一気に欲情したというわけではなかった。むしろ彼はひどく落ち着いていた。ただ、コーデイというこの奇妙な、儂い、イノセンスな顔をするセクサロイドに対して感じるシンパシーや親しみが心の中で膨れ上がっていた。

死んだ人間か死に掛けの人間にしか感じない感情。六年分の渇きが 人に触れ、その熱に触れ、深く安らぐという心の機能が今徐々にコーデイによって潤いを与えられていた。

（助けてくれ……）

誰にもなく、フィリップは祈った。

コーデイははじめに、フィリップの体を強めに抱きしめた。不安を感じる弟を宥める優しい姉のように。しばらく密着し続けた後、そつと彼女は離れ、体に巻いていたシーツをほどいた。

僅かに肋骨のフレームが浮き出ている。小さな乳房とあわせて、フィリップの脳裏を一瞬だけ今は亡きルクレツィアの裸の姿が過ぎつた。それをかき消すよう、彼は名前を呼んだ。

「コーデイ」

「フィリップ……」

コルデリアは、恐ろしいほどに透明で、美しい表情を浮かべていた。内に小さな灯火を宿した氷で出来た無表情。ただ淡白なのではなく、何の表情も浮かべていないそこに、見るものの胸に突き刺さるほどの無垢が存在している。

善悪を知らず、また生と死を知らず。知った振りをすることも叶わず、欲することもまた手の届かぬ夢であるかのように。

フィリップは彼女の左右の胸の間に手のひらを当てた。体温と鼓動、触り心地だけでは生フレッシュの人間と見分けのつかない人工娼婦セクサロイド。

コルデリアは彼の手を振りほどいたりせず、自分の胸骨フレームの上に押し当てたまま、彼の服をゆっくりと脱がせた。時折、短く切った爪と滑らかな指先がフィリップの肌の上をついとなぞった。暖かさが 失われて久しい自らの体温を超える何かの温度が蘇りつつある。フィリップは自覚した。興奮、興味、美意識、本能……それらも確かに喚起されていた。しかし、最も激しく喚起されているのは、忘れてしまったはずの何か かつて愛しいものに捧げていた安心感であり、愛情であり、何より共感であった。シンパシィ。セクサロイドへの。

脱がされ終わってから、フィリップは彼女をもう一度抱きすくめ

た。細やかですべすべとした肌を全身で感じつつ、彼は目を閉じ、ほんの小さな声で呟いた。

「俺には誰もいない。コーディ、誰もいないんだ」

それが、フィリップの魂の叫びだった。死にゆく者にしか共感できない男のさもしい叫び。

「ええ、分かりますよ、フィリップ……今だけは私を錯覚してくださいね……」

錯覚してください 真つ当に感覚するのではなく。

かつて失った恋人であると。

あるいは学生時代に自殺した親友であると。

アル中の父に殴り殺された妹であると。

リビングで満腹になって眠るレンブランドでもいい……。

ここが俺の人生の一番暗い部分だと、フィリップはそう感じながらコーディを抱いた。

お互いの指をなぞり合い、膝で腿を押さえつけ、吐息を交わす。

人工の唾液と生の人間の唾液が混じる。短い、鳥のくびり殺した

らそんな悲鳴を上げるのじゃないだろうかと思わせる、短い呻き声。

どれほどに行為が進み、自身に内蔵された感覚機能を通じて鋭く

「感じ」ようと、コーディは顔を歪めたりはしなかった。頬を上

気させて息が上がりながらも、薄く微笑むか、例の無垢さを形にし

た顔になるばかりだった。

性行為は、御伽噺の中に出てくるようなロマンチックさを本来全

く持たない。スリリングで現実的で直載的で生々しく、それゆえの

メリットもデメリットもあるのが性行為というものだ。それくらい

は、六年間ブランクのあるフィリップでも知っていた。

だが、優しく笑みを浮かべながらフィリップに愛撫され、あるいはフィリップを抱き寄せる彼女の姿には、そういった性行為独特のリアルさが全くと言って良いほどに感じられなかった。それこそ色鉛筆で描かれた絵本の中にいるような優しさと穏やかさがあるだけ

で。

そうであるはずが、快感と興奮だけはきっちりと並在しているのだ。これ以上なく美しい少女コーディ。フィリップは気が狂いそうだった。

鎖骨のくぼみを悪戯っぽくコーディが舐め、ふふ、と笑う。

二人はお互いを貪るようにして数時間を行為に費やした。

コーディの綺麗な瞳。人工の瞳が、フィリップを映している。

行為が一通り終わった後、ベッドに仰向けに転がるコーディを、フィリップは真正面からじっと見つめていた。

(どうしてだ)

気分が落ち着き、代わりに疑問が浮かび上がってきていた。

(どうして俺はこの娘に共感できる いや)

それは正しい疑問の形ではない。ずれている。コーディの裸体を見つめながら、彼は考えた。最適な問いの形を。

「どうして、俺はコルデリアが死にたがっていると思っ込んでいるんだ……？」

死にかけの、死へ向かうもののみ興味も共感も向けられる、フィリップの特質。コーディは、それにあてはまる。フィリップは深くコーディに共感し、興奮し、興味をそそられ、行為に及んだ。

コーディが死にたがっていると感じたからだ。

そのことに、今更気がついていた。

「コーディ」

囁くように、フィリップは呼びかけた。すると、コーディの視点が彼の顔の辺りに定まり、次の瞬間、彼女はまるきりそれまでとは違う口調で言葉を発した。

「あなたは、だあれ？」

舌っ足らずでとてつもなく幼い。表情までが一変していた。

少しの間、フィリップは何かの超常現象で目の前にいるアンドロイドが誰か別の人形と入れ替わったのかと思った。だがそこにいるのは黒髪の少女コーディその人に違いなかった。

彼女への共感が消えていない。彼女は死へ向かうセクサロイドコーディだ。その直感が変わっていなかった。だが

「ねえ、おじさあん、わたしね、コーディっていうの。あのね、いつもはね、オウイディウスのビルで働いてるの。ねえ、ここは、どこなの？」

こいつはどうしたことだ。フィリップは嫌な汗が背中を伝うのを感じた。一体何が起きている？　そういえば、路地りであった時と家に帰ってきたときでは、コーディの話しぶりは違っていったような気がするが……。

「おふとん、あったかあい。ねえ、おじさん、一緒に眠りましょう？　コーディはアンドロイドだけど眠れるのよ」

ぶるりと、フィリップの体が震えた。これは駄目だ。これは、恐らく駄目だ、駄目なはずだ。

「おじさあん」

ぐいと引つ張られて、彼はまたもコーディに口付けをさせられた。彼は震えながら、がたつく指を必死で動かして、ベッド脇の机の引き出しをあさった。

引きずりこまれる。何にという事は分からない。とにかく、何かに引きずり込まれる。自分がシンパシーを感じた何かに。

沈静プログラムの入ったメモリをやったことで掴んで、フィリップは咆哮した。

俺を助けてくれ！

縋る思いでコーデイの耳の後ろに差し込んだ。

がくんと力が抜けて倒れこむ。強制的に、夢のない機械的な意味でのスリープ状態に落とされたコーデイが、ベッドからずり落ちる。人間用の沈静プログラムがあれば、フィリップはそれを耳の裏だるうが首筋だるうが刺したいという衝動に駆られていた。頭を抱えてひとしきり唸ってから、彼はコーデイを抱え上げ、浴室に連れ込んだ。念入りに彼女を洗い、ついでに自分も湯を浴びる。手早く服を着て、コーデイにも適当なものを着せる。

パニックが背中のおすぐそばにあった。だが、一方で徐々にいつもの冷淡さ、落ち着きといったものが戻ってきてもいた。

殺人アンドロイド。六人を殺害した犯罪ロボット。どこかしらおかしくなってしまった悲劇のお人形。

コーデイを肩の上に抱えて家を出て、エレベーターで地下に向かった。既に傾いてしまっている日の光の中を、安物の電気自動車に乗って、フィリップは走り出した。

署には 捜査官達の巢には、あらゆる施設が存在している。生の死体を同時に十体分解剖する場所さえある。人間専門の検視官、ロボット専門の分解解析官、そしてその両方を行うダブル・プロフェッショナル。アンドロイドを細かく調べることに、あそこ以上の場所はそうそうない。

蘇ってきた職業的責任感が、彼の足に更に強くアクセルを踏み込ませるように命じた。

コーデイ…… コルデア ルクレティア。

寂しい時間があったということ。彼は理解していた。とてつもなく、耐え難い時間が半日ほど続いたのだと。

*

「君は随分と切れる捜査官だな、フィリップ」

担当解析チームの長であるその男は、禿げ上がった頭部と立派な白い髭がよく似合う老人だった。この道何十年というベテランで、フィリップなど取るに足らない若造でしかない。解剖室　正式には分解室　の隣の観察室にすえつけられた長椅子に腰掛けて、フィリップは渋い顔をした。

「君の遺伝的残留物質が水で洗ったところで全て流しきれれると思っただか？　彼女の肌はどうだったかね？　機械的な滑らかさと人間らしい表面構造を同居させた芸術的なエマオ・モデルの人工皮膚の触り心地は？　あれは最近の遺伝子研究の成果の一つで、非常にアーティスティックなものなんだが……」

解析官の嫌味に付き合うのは馬鹿げていた。彼らがいかに長く仕事を続け、フィリップの人生全てと同じだけの長さの職歴を持っているようと、関係ない。彼らは権限の図式の上では捜査官に全面協力を強制される立場にある。フィリップは老人の言葉を無視して問いかけた。

「結局、何故彼女は人殺しなんかしたんだ　いや、そもそも最新式のアンドロイドが人殺しをするだなんて、どうして可能だったんだ」

解析官はふんと鼻息をこれ見よがしにならしてみせた。

「人格変容プログラムというものは知っているかね」

フィリップは首を振った。初耳だった。

「一部の、情感的表出が重要視されるタイプの人型アンドロイドに付けられるセーフティ・プログラムの一つだよ」

大窓の向こう　分解台の上に、頭部や胴体を一度分解されて再組み立てされたボディが横たわっている。

「彼女のような特殊な愛玩アンドロイドは、感情面が通常のアンドロイドとは比較にならないほどに作りこまれる。世の中には色々と多様な趣味趣向がある。人の苦痛や不快感の発露を見てこの上なく興奮する輩もいるわけだ」

分かるな、と目で問いかけてくる。勿論、それは知っている。知

りすぎているくらいだ、特殊捜査官ともなれば。

「そういったバラエティーに富んだ客のニーズに答えるには、アンドロイド側の感情回路もまた、バラエティーに富んだものでなければならぬ。通常搭載されることのない回路がいくつも増設される不快、不満、呆れ、激しい怒り、底抜けの悲しみ……だがこれらの回路は、感情表現を豊かに・リアルにする一方で、多くの問題を引き起こす

アンドロイドの最も根本的で最も強固な倫理規定は、誰もが知っている、三条項だ。即ち、『人に危害を与えてはならない、またその危険を看過することも許されない』『前条項に反しない限りにおいて、命令に従うこと』『前掲の二つに反さない限りにおいて自己を保存すること』だ。原典が古典となった今も最新のアンドロイドに搭載される三原則。この三つの原則によって多くのロボット事故は未然に防がれる。更に細かな事故や、倫理条項同士の矛盾や衝突、状況判断の曖昧さによる不適切行動の選択などの問題を解消する為に多くの規定プログラムが人工知能には書き込まれる。

愛玩ロボットの細かく激しい感情回路の機能は、こうした細かな補助倫理規定を無効にする怖れがある。人に危害を加えない為にはそれを意志しないのが最も良い。だが怒りを抱くようにプログラムされたアンドロイドは、そのリアルな感情表出の過程で人に怒り、殺意まで抱く。それを喜ぶ客がいる限りな」

アンドロイドが泡を吹いて怒り、裸で鎖に繋がれたまま殺してやると絶叫するのを、ワイン片手にニヤニヤ笑いで見つめる人間。そうそう珍しい光景ではない。少なくとも、この国のいくつかの歓楽街では。

「だがそうした強烈な、危険性を秘めた感情機能が働き続けると、やがて機械はある破綻へと行き着く。プログラムの命令に従い怒り続け、しかし三条項の第一項の倫理規定は人への危害及び危害を加える可能性の看過を禁止している。殺したいという気持ちとその気持ちを浮かべてはいけないという倫理規定。その反発の中で、

人工知能は アンドロイドたちの心は、最も論理的に妥当な解決地点を探して行き着く」

「解決……一体どんな？」

「プログラムとしての自壊……三原則の第三項を『上手く』適用して、第一・第二条項の死守の為に自らを自壊に追い込むんだ」

薄く解析官が息を吐く。諦観になれなかった人間の息の吐き方だった。窓の向こうの少女を見る瞳には、哀れみだけが湛えられている。「アンドロイドはつまるところ道具だ。誰がどう言おうと、愛好家達が眉を吊り上げようとも。三原則は、道具であるものに求められる規則だ。危険であってはならない、人に使われなければならない、勝手に壊れてはならない……アンドロイドの感情回路の複雑化・増設による自壊はすぐに問題になった。

製造企業は解決策として、人格変容プログラムを打ち出した。これは、極端な感情をアンドロイドが抱き続けた際、来るべきクライシスを避けるために、その人格を、少しばかり変質させることで安定させるというものだった。苦痛にさらされたアンドロイドは時間をかけて人格変容を行い、苦痛のある程度受け入れる人格を獲得する。時間をかけての変化であるために、そのアンドロイドが苦痛を嫌がる様を観察したいユーザーが満足した後にその変化が完成する。商業愛玩用アンドロイドはこれによって一気に長寿命化した」

「人格の変容？」

ちらりと、フィリップの視線が横たわるコーデイに向いた。

「勿論これは、『自己同一性保持機能』とセットで使われる。表層的な人格が緩やかにではあれ変化する一方で、自己が自己であるという認識、目的意識や自己認識のレベルでの人格が同一のまま保たれる機能のことだ。これによってアンドロイドは人格変容を行いつつまた元の人格に戻ることが可能だし、人格の変化した自己を自己だと認識できるようになる」

緩やかな人格変容のシステム。では、コーデイのあの変わりようは……？ フィリップは黙り込んで考えた。

「彼女　　コルディアの不幸はなんだったと思う？　フィリップ捜査官」

「不幸？」

「そうだ」

アンドロイドの不幸　　ひどくナンセンスな響きだと、彼は感じた。不幸だつて？

出来ない生徒を見る目で解析官フィリップをじろりと睨んだ。

「彼女のメモリを全て洗ったよ。彼女は製造されて三ヶ月以内に、百五十人ほどの客を取らされている　　これはメーカーが保証する期間・人数比の二倍近い数字だ。」

短期間に多くの客の相手を行い、多くの行為の中で、多くのストレスを彼女は感じるようになっただろう。対磨耗基準を超える損傷もいくつも見つかっている。客の中にはどうやら彼女の腹部を執拗に痛めつけるのがたまらなく好きなやつもいたらしい。

とにかく、そうした環境におかれた彼女は、極限状態にあった。人工知能は崩壊を防ぐ為人格変容を繰り返し、またそのスピードも加速していった」

白い肌。黒い髪。何色にもなる。シフトするセクサロイドの不幸。「結果、彼女の同一性はそれ自体が変質した。」

自己同一性保持機能は、あまりにころころと変わる人格に翻弄され、基本人格というものを設定し切れなかった。保持機能が選んだ基本人格、同一性を持つべき自己は、『変化し続ける自己』だった。変化すること、変化し続けることこそが己のアイデンティティであると保持機能は判断し、設定した」

「そうしたことがないように、メーカーは自社のアンドロイドの愛玩機能に保証制限範囲を設定し購入者に守らせるよう努力する」

ほとんど上の空でそう呟いたフィリップに、解析官が頷いた。

「変化し続けることこそが自己である。そう設定された彼女にとって、変化しない期間、つまり人格変化と人格変化の間の期間、一つの人格でいる間の期間は、自己同一性の保証されない期間となった」

自己同一性の保証されない期間とは即ち、自分が自分ではない期間ではないのか。フィリップは両手を組み合わせて膝の上に置き、自分の動悸が早まっていくのを必死で抑えていた。

「自己同一性から解放された諸人格は、同時に倫理規定からも解放される。分裂症、多重人格症の人間と似た存在だ。」

つまり、倫理規定を課されている自分は今の自分ではなく別の自分であるという認識が人工知能の中で成り立つ。この瞬間、コルディアは殺人や自殺を自由に行える一個の制限なきロボットとなりかけていた。その上で。

彼女は強いストレスに連続的にさらされていた。絶え間ない人格変容は、やがてそれ自体が不安をもたらすようにもなった。自分の人格が変わり続け、ふとした瞬間いきなり見知らぬ場所にいる。自分は誰だろう、ここはどこだろう。そういった不安だ。そしてその不安がストレスとなり、次の人格変容を呼び起こす。そうして人格変容がぐるぐると暴走し始める。人格変容がストレスを緩和し、緩和する為の人格変容が次のストレスを生み出す。繰り返した」

死へ向かうストレス。フィリップは理解しかけていた。なぜ自分がコーデイに惹かれたのか……死に向かう誰かにしか興味の持てない自分が……。

「大きなストレスにさらされ続けた人間は容易く自殺する。彼女、コルデリアには自己保存の規定がプログラムされていたから容易にはそれが出来なかった。だが自己同一性を失ってそれも回避できていた。」

あとは、時間の問題だったんだ。人格変容の直後に襲い掛かる人格変化によるストレスと、その人格でいる間に受けたストレスが合計されてある一定の値を超えれば、彼女は感情にしたがって自由に楽になる道を選んだだろう」

そこで初めて、解析官はにやりと笑った。馬鹿にするような笑みだったが、力強い笑みだった。

「人格変容プログラムは半日で作動するまでにその作動間隔を狭めていた。あと少し、最後の一押しになるストレス。無理強いや虐待があれば、彼女は自分で自分の眼球に箸やフォークでも突き刺して自殺を遂げることができていただろう」

「彼女は死を望んでいた？」

「その通りだ。総体として絶望感しか持たない知能は自由なデリートを望んだらしい。皮肉なことに、自壊を回避するためのプログラム群の暴走によって自殺を志したというわけだ。高度でリアルな感情を作りこまれていた彼女にとって、絶望から死を望むことは自然なことだった。」

そのためにも、彼女には最後のストレスが必要だった」

はつとして、フィリップが顔を上げる。

俺は、コーデイが俺に迫る行動が、てっきり、セクサロイドとしての機能から来るものだと思っていた。だがあれは

「その最後のストレスは、君との性交渉によって得られるはずだった。何せ彼女のような良い出来のセクサロイド相手に異常興奮しない男はほとんどいないわけで、実際彼女の記憶メモリにある『幸運な男達』は誰もが脳血管疾患を誘発しかねないほどに興奮し、彼女を乱暴に扱ったりしつこく長時間にわたって行為を求め続けた。」

君も他と同じく彼女にストレスを与えるはずだった。コルデリア

自身無意識の自殺願望に従って、最後のストレスを君から得るつもりだった」

あれは、自殺幫助の求めだった。

「だが君は、よっぽど優しく彼女を愛したようだな？ 解析官はコルデリアが最後に行った「行為」の最中、ほとんどストレスを感じず、逆に穏やかな安心と快楽を味わったことだけが記録されていると報告してきている。これにより、コルデリアは幸せなままに行為を終え、同時に最後のストレス入手のチャンスを失い、おまけに君にこの本部まで連行されてしまったわけだ」

「なんてことだ……」

「君はコルデリアを慰み者にしたどんなサディストたちよりもサディスティックに彼女を扱ったんだ、フィリップ捜査官」

解析官は締めくくって、観察室を退出した。報告用のデータ・チップを机の上に残して。

フィリップは窓越しに眠り続けるコーデイを見つめた。

死にたがるアンドロイドは、今は目を閉じ強制スリープの暗闇の中にいる。

衝動的に腰から銃を抜き、自らに向けてみる。だがそこで、あることに気がついた。本当に、この二日間は何から何まで失敗だらけで、上手くいくということがない。不幸の連続だった。

フィリップは盛大に舌打ちした。畜生、くそつたれ。大いなる失策だ。

(家に猫がいるんだ)

賢い黒猫。ようやく懐いたばかりの子猫。自殺を求めてかたかたとふるえる指が、トリガーの手前で止まってしまっていた。

今回の件でとんでもないお咎めをくらうだろう。減俸や謹慎で済めば良いが……。

銃を降ろして、彼はその場に蹲った。

俺の倫理条項第三項 賢きレンブラントが、自己を保存せよと囁いているせいで、俺は自殺が出来ない。

アンドロイド以下の、自由。
未だ肌のあちこちに、コーディの温度がこびり付いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9117v/>

撓垂れ少女の生的倒錯

2011年8月19日03時16分発行